「胡金銓（フー・キン）唐書璇（セシル・タン）そして」

2023年9月に行われた「福岡アジアフィルムフェスティバル」は、大きな切掛を与えてくれたイヴェントとなり大変感謝している。というのも、今年の上映で胡金銓という映画監督の存在を知ったからだ。このとき見た「大輪廻」（1988　台湾）は胡金銓、李行、白景勝の三人によるオムニバス作品であり、胡金銓単独の作品が見たくなってしまい、何とか「龍門客桟」（1967）、「侠女」（1970）の二本を見ることができたのは幸いだった。

中国映画、香港映画、台湾映画という分け方があるが、実はこの本土、香港、台湾という三つの地域を往来して制作活動する映画監督は多いようだ。胡金銓（1931〜1997）という人も生まれは北京で、1949年の中華人民共和国建国時に香港に渡った経歴を持っている。そして、1960年代には香港で北京語の作品を監督し、1970年代に香港で広東語の作品が主流になると台湾に移り、そして1990年代には北京の撮影所に移ったという数奇な監督人生を送った人だ。だが、胡金銓のアイデンティティはやはり中国本土そして京劇の世界に通じているように思える。四方田犬彦は「一本のフィルムから主観や心理といったその他の夾雑物の一切を排除しようとする彼の積極的な姿勢は、伝統的大衆芸能へのノスタルジックな偏愛に由来している」とは、まさに胡金銓の映画作家としての実像を言い当てている。要は理屈抜きの切れのあるアクションシーンこそが胡金銓映画の真骨頂戸と言える。また、胡金銓作品を支えた撮影監督の賀蘭山の正体は、満映で内田吐夢の薫陶を受け、中川信夫の名作「東海道四谷怪談」（1959）の撮影を担当した西本正（筑紫野市出身）であることも付け加えておきたい。

香港発のカンフーブームが世界を席巻したが、その基盤を作り火付け役的存在でありながら、香港を去らなければならなかった不幸は衝撃的だ。また、胡金銓にとっての不幸は、先に挙げた名作「龍門客桟」の邦題が「残酷ドラゴン血斗龍門の宿」であったことだ。これでは三流のカンフー映画しか想像できない。その証拠に批評家の注目を引くこともなく、興行的にも失敗している。

胡金銓について調べていく過程でもう一人の映画監督を発見した。唐書璇（1941〜　）という女流監督で、彼女も中国本土の雲南省の出身だが、香港に育ち二十歳でUCLAに留学し映画学を専攻した。1966年に香港に戻り、デヴュー作「董夫人」（1968）を発表、アカデミー賞外国語映画賞にノミネートされパリでの成功を収めるが、香港では不評で三日間の上映で切り上げられてしまう。失意のうちに1972年に本拠地を台湾に移し「再見中国」（1972）を制作。だが、香港では1981年まで、台湾では1988年まで上映が禁止された。

「董夫人」では細やかな主人公の感情表現が目立ち、デヴュウ作とは思えないほどの緻密さと完成度を備えた作品に仕上がっているし、「再見中国」では体制に反対し中国本土から脱出し香港に向かう若者たちの焦燥感と高揚感が瑞々しいタッチで描かれ、全体を貫く緊張感は何と言っても彼女の最も主張したかった自由と解放というテーマを明確に表現した。「董夫人」の撮影を担当したのは、長年サタジット・レイの作品に参加したシュブラット・ミットロであったことも付け加えておきたい。映画制作の場から退いたが映画雑誌の発行を行ったり、2014年にはアメリカ、ゲール・リテラチャー・リソース・センターで講演を行い健在ぶりを見せている。現在のとこ

ろ、唐書璇の作品を日本語字幕で見ることができないのは大変な損失だと考えている。映画を自己主張の手段として、これほどまでに真摯にかつ謙虚に撮った映画作家は決して多くはいないだろう。

中国の映画について語るべきことは多々あるが、1949年に建国された現在の中国ではこれまで市井の人たちは大変な辛苦を重ねてきた。現在活躍している第五世代の監督たちは、映画作家になる前に文化大革命という激烈な時代をくぐってきた人たちだ。この世代には張芸謀、陳凱歌といった国際的に評価される監督たちもいる。特に陳凱歌は若い時分に紅衛兵だった経歴を持っている。文化大革命を生き抜いた陳凱歌は、自身の著書「私の紅衛兵時代」で、「愛が一時の局部的な特定の非普遍的なものだったのに対し、憎悪は長期的で全面的、普遍的なものだった。愛は毒薬であり、愛情は堕落、ヒューマニズムは偽善だった。だが、憎悪は正義を意味し崇高な、そして安全なものだった」としているが、こうした時代を生きなければならなかった人たちの不幸が強烈に脳裏に焼き付いてしまう。（12.28.2023）